

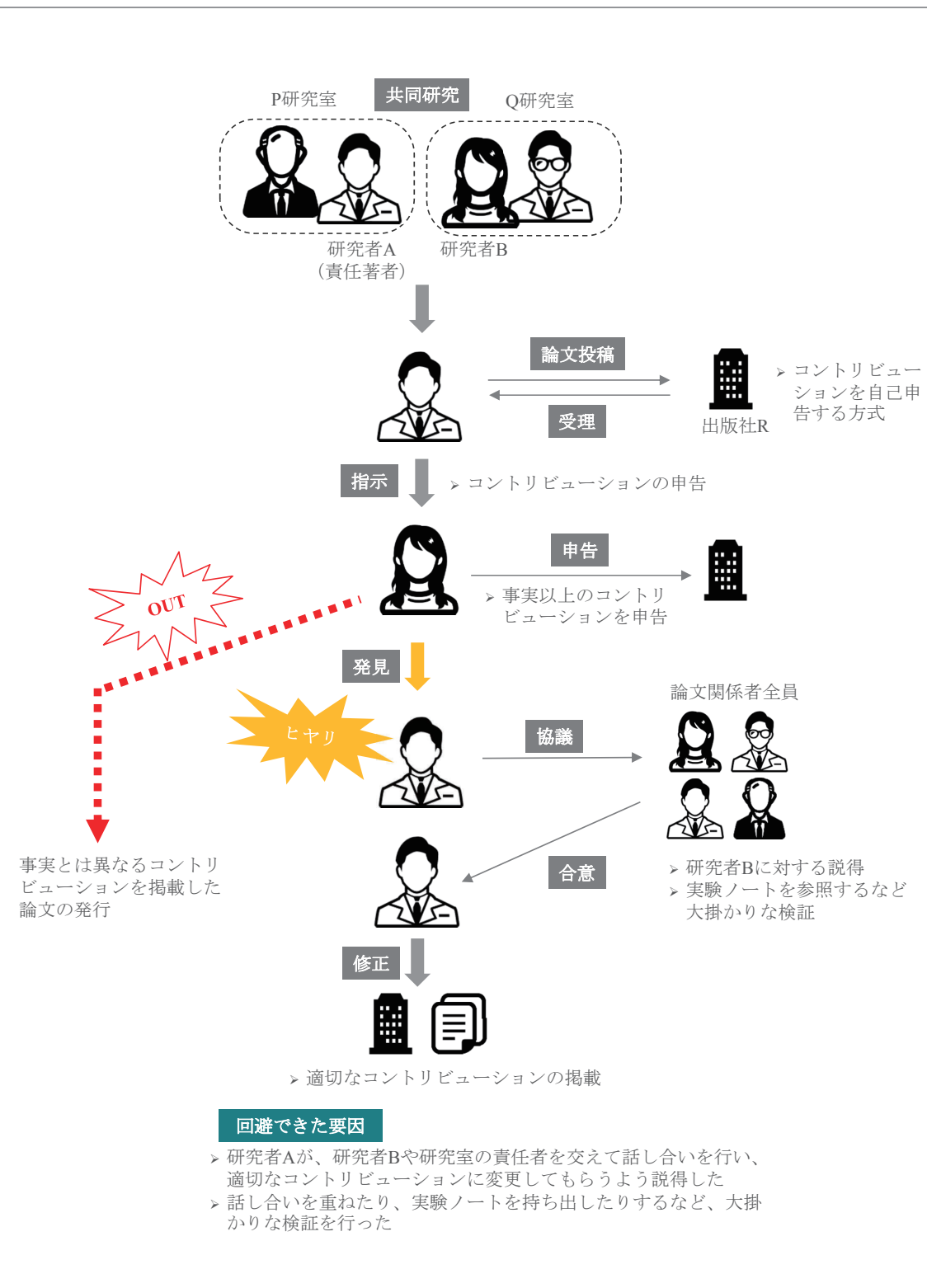
3 オーサーシップ

1. 不適切なコントリビューションの自己申告
2. ギフト・オーサーシップ

コラム2 ギフト・オーサーシップ

3-1. 不適切なコントリビューションの自己申告

所属機関	大学、大学病院	分野	生命科学
------	---------	----	------



1. 事例の詳細

- 研究者 A は、多施設で実施した共同研究の成果を責任著者として論文にまとめ、出版社 R の雑誌へ投稿し受理された。当該雑誌では、共著者の論文へのコントリビューションを各自が申告する方式をとっていた。
- そこで研究者 A は、共著者に対し、出版社 R にコントリビューションを申告するよう指示した。
- その後、研究者 A は、共著者である研究者 B が事実以上の過大なコントリビューションを申告していたことを知った。出版社 R に連絡して修正を依頼したところ、修正には共著者全員の承諾が必要であったため、論文受理後に関係者間で話し合いを持つことになった。🔍 回避できた要因
- 研究者 B はなかなか納得しなかったが、最終的には適切に修正することについての同意を得た。
- 以降、研究者 A、研究者 B がそれぞれ所属する研究室間で共同研究を行うことはなくなった。

2. ヒヤリ・ハットの背景・要因

- 研究者 B は、所属する研究室内でもコントリビューションを誇大に説明していたため、研究者 B の研究室の責任者も不適切な自己申告を認識することができなかった。

3. 回避できた要因及び背景

- 研究者 A と研究者 B がそれぞれ所属する研究室の責任者を交えて話し合いを行い、研究者 A は適切なコントリビューションに変更してもらうよう説得した。話し合いを重ねたり、実験ノートを持ち出したりするなど、大掛かりな検証を行った。

4. 起こり得る研究不正等

- 不適切なコントリビューションを記載した論文の発表。

5. 予防策・対応策

- 各共同研究機関の役割や責務を文書により明確にすると共に、研究の進捗等について、各機関の責任者を含めて定期的にコミュニケーションをとる。
- 論文執筆前に共著者全員のオーサiershipやコントリビューションを文書により明確にし、合意を得ておく。

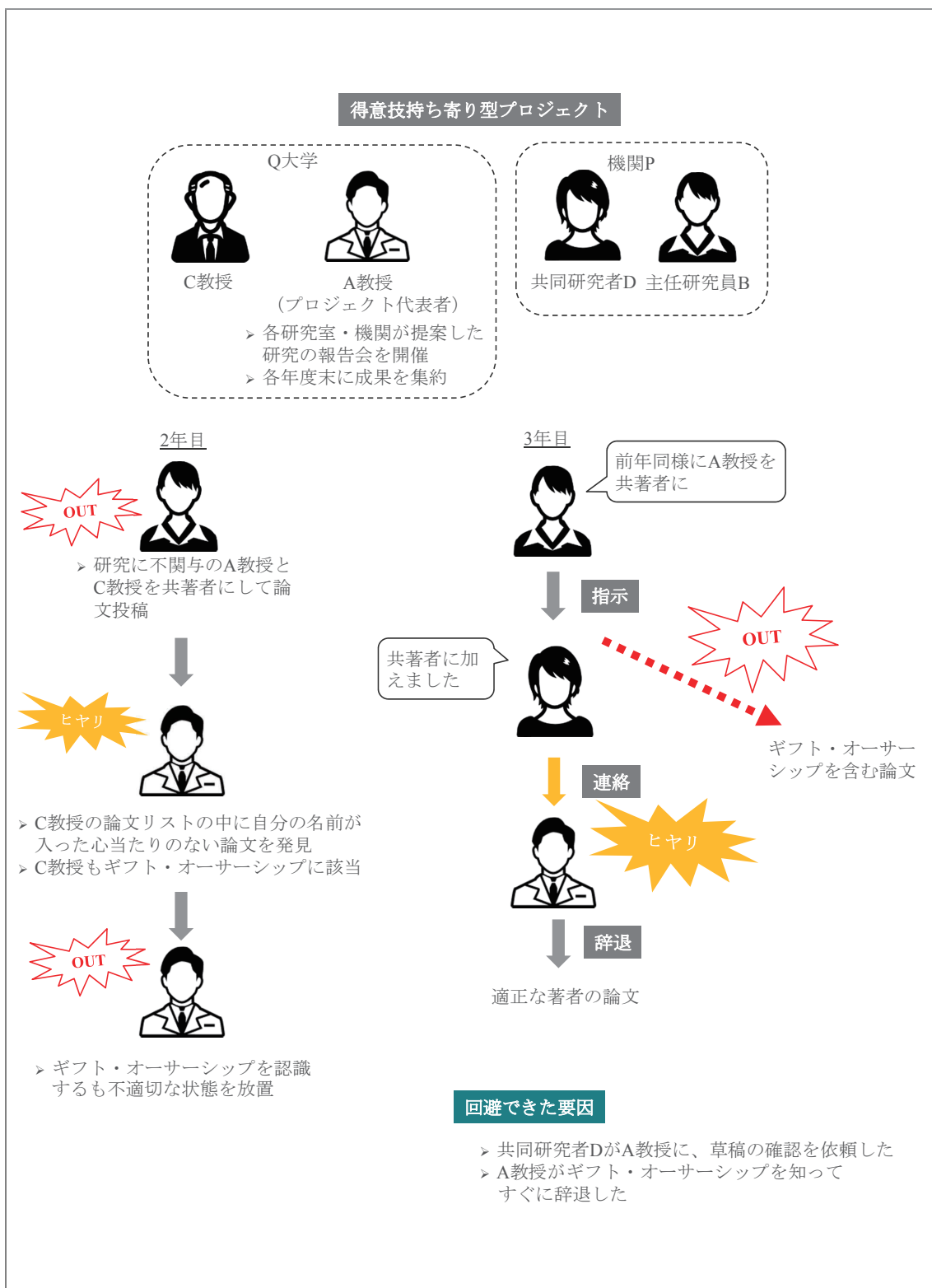
(解説)

研究成果におけるクレジットとは、「科学者の研究への貢献を認めること」であり、「科学者個人の評価の基盤となり、就職・昇進といったキャリアや研究費獲得などにおいても大きな意味を持つ」¹。そのため、各研究者のコントリビューションを反映した正確な記載が求められる。

1 日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会編『科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－』、p.65、丸善出版、2015

3-2. ギフト・オーサーシップ

所属機関	大学、大学病院	分野	生命科学
------	---------	----	------



1. 事例の詳細

- 複数の大学（研究室）・公的研究機関が参加し、「得意技持ち寄り型プロジェクト」を行っていた。
- A 教授はプロジェクトの代表を務めており、各研究室・機関が提案した研究の報告会を年 2 回開催し、各年度末に成果をまとめる役割を担っていた。A 教授はメンバーの個々の研究には関与しておらず、論文投稿や特許出願は各研究室・機関に任せていた。
- プロジェクトの 2 年目に、公的研究機関 P の主任研究員 B は A 教授の名前を共著者に入れて論文を投稿し、受理された。論文が発表された後、A 教授は同じ大学の C 教授の論文リストに自分の名前が入った心当たりのない論文があることに偶然気づいた。C 教授は当該論文の最終稿を確認していたものの、A 教授と同様に主任研究員 B の研究には直接関与していなかった。
- 当時は、研究機関や出版社において、オーサiershipに関するルールが徹底されていなかった。主任研究員 B は、事前に A 教授の了解を得ることなく、慣例に従ってプロジェクトリーダーであった A 教授の名前を著者に加えていた。
- 主任研究員 B はプロジェクトの 3 年目にも論文を投稿した。しかし、その際は、主任研究員 B の共同研究者 D から A 教授宛に投稿論文の草稿を添付したメールがあり、A 教授を論文の著者に加える旨の連絡があった。☞ 回避できた要因
- A 教授は、ギフト・オーサiershipを丁重にお断りした。

2. ヒヤリ・ハットの背景・要因

- 本来、当該研究の中で重要な貢献を果たしていることが論文の著者になる要件¹であるが、主任研究員 B は、プロジェクトの代表者を共著者に加えるという慣例に従い、当該研究に直接関与していなかった A 教授の名前を著者に加えた。
- プロジェクトの 2 年目の論文でギフト・オーサiershipが回避できなかったのは、A 教授と主任研究員 B の間でコミュニケーションが不足していたためと考えられる。
- A 教授は、プロジェクト 2 年目の論文の存在に気づいた時に多忙だったため、主任研究員 B に「今後は著者に加える必要はない」とすぐに申し入れなかった。

3. 回避できた要因及び背景

- プロジェクト 3 年目の論文投稿の際、共同研究者 D は、A 教授に対し共著者へ加えることをメールで確認した。
- A 教授は、その年の論文実績が乏しかったため心が揺れたが、研究者倫理に反すると考え直し、主任研究員 B からのギフト・オーサiershipを断った。

4. 起こり得る研究不正等

- 著者が適切ではない論文の発表。

5. 予防策・対応策

- 論文の投稿時には、責任著者はオーサiershipを確認する。
- 論文の投稿時には、複数の人の目を通し、適切なオーサiershipやコントリビューションであることを確認する。

（解説）²

著者としての資格がないにもかかわらず、真の著者から好意的に付与されるものは、「ギフト・オーサiership」と呼ばれる。研究について説明責任を負うのが著者であるため、実際には研究に貢献のなかった者を著者として記載することは許されない。

1 日本学術会議「回答 科学研究における健全性の向上について」、p.2、2015 年 3 月 6 日

2 日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会編『科学の健全な発展のために―誠実な科学者の心得―』、pp.67-68、丸善出版、2015

コラム2 ギフト・オーサーシップ

著者としての資格がない者を、著者に加えることはギフト・オーサーシップ (gift authorship) と呼ばれる不正行為です。「科学の健全な発展のために」(グリーンブック)¹で学術論文の投稿規定の一例として、国際医学雑誌編集者委員会 (ICMJE) の統一投稿規程が紹介されています。それによれば、論文の著者に名を連ねるには、

1. 研究の構想・デザインや、データの取得・分析・解釈に実質的に寄与していること
2. 論文の草稿執筆や重要な専門的内容について重要な校閲を行っていること
3. 出版原稿の最終版を承認していること
4. 論文の任意の箇所の正確性や誠実さについて疑義が指摘された際、調査が適正に行われ疑義が解決されることを保証するため、研究のあらゆる側面について説明できることに同意していること

のすべての条件を満たす必要があるとしています。この投稿規定に従うなら、たとえば、機関の長やプロジェクトの長を機械的に著者に加える行為はギフト・オーサーシップとみなされることになります。分野によっては慣例的に全てを満たさないことを容認している場合もありますが、この規定が世界標準になりつつあることを認識しておかなくてはなりません。異分野との共同研究の論文の場合、オーサーシップの扱いには十分に注意する必要があります。

1 日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会編『科学の健全な発展のために―誠実な科学者の心得―』、p.66、丸善出版、2015

Web 版: <https://www.jsps.go.jp/j-kousei/data/rinri.pdf>, pp.66-67